

2006年10月31日開催 第512回 番組審議会

■ 出席委員

櫻井美幸副委員長 大村英昭委員 木下明美委員 國定浩一委員
黒田勇委員 東野博昭委員 藤原健委員
荒巻裕委員長(書面参加)

■ 毎日放送出席者

山本社長 石橋専務 本多専務 田中常務 上田常務
山西報道局長 西岡ラジオ局長 東編成局長 三村制作局長 熊広報室長
三村制作局長 長富プロデューサー

◆テレビ番組「丑三つ亭」

5月26日(金) 24時25分～25時26分放送

毎日放送の第512回番組審議会は10月31日大阪市北区の本社で開かれ、5月26日(金)24:25～25:26放送のテレビ番組「丑三つ亭」を審議しました。

この番組は上方の若手落語家42人を、丑三つ時(深夜2時)に集めたスタジオ・ドキュメント番組。緊張した面持ちの若手落語家に与えられたのは、たった一つのなぞかけ、「落語家とかけて」。なぞかけの答えを判定するのは、桂ざこば師匠。全員が合格するまでは、番組収録は終わらない。

平成18年日本民間放送連盟賞のテレビエンターテインメント部門の優秀賞を受賞した番組。

委員の主な意見

- * 短いたった一つのなぞかけだったが、短いほど難しいのが落語の世界。短いなぞかけは若手には酷だ。若手落語家がテレビで本芸の落語を演じる機会を、深夜でもいいからぜひレギュラー番組を作ってほしい。
- * 番組全体が腑に落ちない。若手になぞかけは無理だろうし、番組としての最後のオチもないようだ。若手落語家とは、何を考えているのかを、なぞかけで語らせるこ

とで見せようとした狙いは面白いが、無理があった。

*ざこばさんが光っていた。ああ、やっぱり、継続は力なり。歳を重ねての芸は味がある。ジャッジする時の表情を見てるだけでもおもしろかった。

*テレビの漫才コンテストはあるが、落語のコンテストを。古典落語の本格的なもの、アドリブと、2つの力量を競わせる。上方落語の若手を育てていく、そういう工夫がテレビにあってもいいのではないか。

*落語好きの人が、落語好きのためにつくったような番組。一つのパッケージとして、上方落語の世界が凝縮されている。司会の宮根誠司さんは好印象。

*おもしろかった。丑三つ時の戦い、真剣に、また涙ぐんだり、達成感もあり。番組収録が終わって、明るい朝の時間に、普段着で帰っていく。「ああ、若手の落語家の人たちって、どういう生活してるんだろう」と思ったり。ルールをあまり知らないスポーツを、案外おもしろいなと思って見た、そういう感じ。

*見応えがあった。悶々として顔が真っ赤になっていく、瞬き、つばを飲み込む音まで聞こえてきそうな緊張感。

*企画・着想力の巧みさに拍手を送る。問いかけを一問に絞ったのがよく、熟慮したうえで“Simple is best”に到達したのではないか。上方テレビ局の心意気、ここにあり。42人の勢ぞろい、上方にこんなにも多く落語家がいたのかと驚き、かつ楽しくなった。

◆ 報告事項

去年10月に放送した毎日放送の「仁和寺音舞台」が、2006年アジアテレビ賞

の「音楽番組部門」「ライブ・イベント部門」「エンターテインメント部門」の3部門で入賞したことを番組審議会事務局長が報告しました。アジアテレビ賞は、アジア地域で制作・放送されたテレビ番組の中から最も優れたものに贈られる賞で、参加資格をアジア24か国・地域に限定したものとしては、唯一のコンテスト。